セイスポ
星槎スポーツ新聞
第18号★2018年1月17日(水)
星槎グループ セイスポ編集部発行
神奈川県 中郡大磯町国府本郷 1805-2

第26回 全日本高等学校女子サッカー選手権大会

得点に沸く

昨年度に続いて、関東第2代表として臨んだ全国大会だった。対戦相手は関西代表で大阪府の大商学園高等学校。昨年度の準優勝校ということと、全国大会の初戦という非常に緊張する中で試合が始まった。星槎の代表として、神奈川県・関東地方の代表として多くの方に支えられてこのグランドに立てることを噛みしめて奮闘したが、立ち上がりから星槎のペースをつかめず、一進一退の攻防が続く。そんな中、ちょっとした隙をつかれ前半に相手のロングシュートが星槎ゴールキーパーの頭上を越えそのまま失点をしてしまった。ビハインドのまま前半は終わり、追う展開となる。

ハーフタイムでは前半を振り返り修正をし、もう一度気持ちを入れ直して臨んだ。そうすると後半は少しずつ星槎ペースとなり、相手陣内でボールを持つ時間が多くなる。相手が偏った守備を星槎は見逃さずに、サイドチェンジからフリーで星槎の選手がボールを受けられ、大きなチャンスが生まれた。そのチャンスを冷静にゴールキーパーの頭上を越えるシュートで同点弾を決めた。やっとの思いで追いつき追加点を奪いたいところだが、相手のコーナーキックを守り切れず、相手の執念で押し込まれた形で1―2とまた追う展開となる。

なんとか同点にしようとパワーを持って前から相手に向かっていくが、ゴールは遠く同点弾は入らず、試合が終了した。1―2で1回戦敗退。勝ちきれなかったことは非常に残念だが、後輩たちにとってはとても大きな財産を得る機会となった。

県予選から全国大会までご声援ありがとうございました。今後も是非、星槎国際湘南女子サッカー専攻へのご声援をよろしくお願い致します。

大会1回戦 結果

2017年12月30日　13:30キックオフ
@三木防災公園陸上競技場

前半　0−1
後半　1−1
星槎国際高等学校 1−2 大商学園高等学校

◆ **星槎国際高等学校得点:** 斎藤美岬（3年）

VOICE

総監督　柄澤 俊介

昨年度は準優勝、その前も常に安定して上位に入っている大商学園高等学校。相手はハードマークと相手の背後にボールを送ることを徹底してきた。ボールが安定しない中でも自分たちの持ち味を発揮しようとしていたが、途中展開が狭くなり混戦が続いた。その中で、相手の40mくらいのロングシュートが入ってしまい失点。前半を折り返す。

ハーフタイムでは攻守の切り替えを早くする、戦術的にハートでも繋がることを指示し送り出した。後半、交代選手の活躍がチームを活性化させ、同点ゴールを奪うことができた。しかし、後半も残り少ない時間でコーナーキックから失点してしまった。

相手の勝利に対する執着心は非常に強いものがあった。課題を整理して次につなげたいと思う。

遠方まで応援に来てくださった皆様、テレビ観戦をしていただいた皆様、支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。次に向けてチームは再始動しております。

今後ともご声援のほどお願い致します。

夏目 萌由（3年）

この大会を通して、仲間の存在の大きさを感じました。失点しても、最後まで自分たちを応援してくれた仲間には感謝しかないです。1回戦敗退で終わってしまいましたが、結果以上に多くのことを学ぶことのできた大会でした。応援ありがとうございました！

斉藤 美岬（3年）

遠くまで応援に来てくださりありがとうございました。今回の試合では今まで以上に声を掛け合い全員で戦えた試合になったと思います。また、応援をしてくれた方々の力でスタジアムがホームと感じられとても元気をもらうことができました。

最後の試合となってしまいましたがチーム全員で戦う姿を多くの方々に魅せることができたと思います。今後とも応援よろしくお願い致します。

望月展弘の目

最後まで諦めずひたむきに勝利を目指す姿はいつでも感動を与えてくれる。だが、今回勝利の神様は微笑んではくれなかった。W杯も同様だが、こういった大きな大会は初戦が一番難しい。初戦ということで堅さも見られ、いつものようなプレーがなかなかできない。リズムを取り戻そうとすればするほど焦りが生じて思い通りにいかなくなってしまう。

今回の試合もやはり同様に感じた。対戦相手の大商学園高等学校はディフェンスラインの選手がとにかく強く逞しかった。自分たちの裏は取られないようなラインディフェンスにブロックを構築し、見えているところで星槎が得意とするポゼッションをさせていた。ボールを奪うと一気に星槎のディフェンスラインの背後を目掛けてボールを大きく放り込み、全体を押し上げ星槎のエンドで激しくプレスを掛けてくる。勝敗は、最後までこの戦い方を実践した大商学園高等学校に軍配が上がった。

それでも星槎も後半に一度はリズムを掴んだ。同点ゴール後は確実に星槎のペースだったが、決定機に勝ち越しゴールをあげられなかったことで苦しくなってしまった。勝敗は小さなことで決まってしまう。そんな勝負の怖さを実感した試合だった。しかし、懸命に勝利を目指して戦う姿は美しい。勝利を目指して戦うプロセスが、ひと回りもふた回りも大きくしてくれる。そしてそれを応援する人たちの心も成長させてくれる。負けたことには意味がある。この悔しさを糧に次のステージで自信を持って頑張ってもらいたい。本当に感動をありがとう！

攻撃に転じる

本田仁海選手 オリックスバファローズ 新入選手入団発表

平成29年12月17日(日)13時から大阪帝国ホテルにて、オリックスバファローズの新入選手入団発表記者会見が行われた。思い起こせば9月21日にプロ志願届を提出し、夢のプロ野球選手を目指して10月26日に開催されたドラフト会議を待った。

『オリックスバファローズ本田仁海 星槎国際湘南』とアナウンスをされた。皆が喜んだ。感動した。でも、うれしいばかりではない。プロの世界に飛び込むのだから、覚悟を決め今まで以上の努力をしなければならない。寮に残りトレーニングに励んだ。そして今日、入団発表会の日を迎えた。

テレビカメラ約15台、記者約30名、ファンクラブ会員約300名。その中での入団発表会は緊張感高まるものだった。

入団発表

質問に答える本田選手

入団発表会インタビュー

入団が決まった気持ちは？

▼本田　バファローズのユニフォームはかっこいいので、そのユニフォームを着てプレーができるということがうれしいです。

自分のセールスポイントは？

▼本田　インコース、アウトコースへの制球力に自信があるので、そこをファンの皆さんに見てほしいです。

対戦したい打者はいますか？

▼本田　北海道日本ハムファイターズの清宮選手に高校一年生の時に練習試合でホームランを打たれているので、プロの世界ではしっかり抑えたいと思っています。

来シーズンの目標は？

▼本田　一日も早く一軍に上がって自分が活躍する姿をファンの皆さんに見て頂ければと思います。

はじめは緊張して、壇上に上がるとき、少し戸惑いを見せたが、インタビュー時は、はっきりと力強い言葉で一つ一つ丁寧に答えていた。一番前の席で見守る母親の顔にも笑顔が出てきた。

インタビューの後は、ファンクラブの方たちとの記念撮影。本田投手は握手や記念撮影に応じていた。一人一人のファンの方に「ありがとうございます」と一番大きな声で挨拶をし、記念撮影を終えた。この姿は今まで見たことがない本田投手の姿。もうプロ野球選手の一員として踏み出している。これからも全力で応援したい。（大村眞弓）

星槎オリンピック クリエイティブ 2017

第16回 星槎オリンピック クリエイティブ部門が、12月8日（金）に川崎市教育文化会館で行われた。今大会の目的は、出場生徒、スタッフ、観客らが互いに共感し、表現し合う体験学習の場を提供し、集団で学習する楽しさと星槎の生徒としての連帯感を体験させ、心豊かで力強く生きる人格形成を目指すことだ。併せて、「スピーチ部門」の決勝大会と全国から寄せられた生徒の美術作品を披露する移動美術展も同時に行われた。

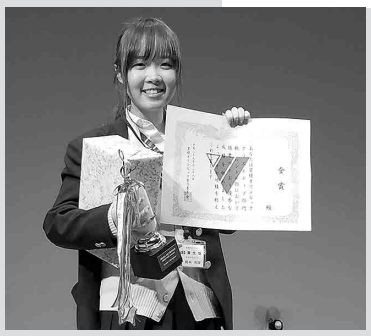
歌やバンドでの演奏を競う「歌・バンド部門」は12組、ダンスや歌とダンス、演劇を取り入れた「総合パフォーマンス部門」は10組の計22組が出場した。

スピーチ部門は、10月3日から6日の期間で28名の生徒による地区予選を実施、北海道・東北ブロックから1名、関東ブロックから2名、近畿・中部・北陸ブロックから1名、中国・四国・九州・沖縄ブロックから2名の6名が全国大会にすすんだ。11月7日に行われた全国大会で勝ち抜いた3名による決勝大会となった。

VOICE

歌・バンド部門 金賞
岡本 和奏

私は、昨年も星槎オリンピッククリエイティブ部門に出場しました。今年度は昨年のリベンジのため金賞狙いました。結果は金賞。本当に嬉しい限りです。支えてくださった方々に感謝の気持ちで一杯です。本当に貴重な経験をさせていただきありがとうございました。


「歌・バンド部門」金賞 岡本和奏

「総合パフォーマンス部門」金賞 P→★number

星槎オリンピック クリエイティブ部門 結果

◆ **歌・バンド部門**

金賞	星槎国際福井	岡本 和奏
銀賞	VAW栄光ハイスクール	杉山 美羽
銅賞	川口キャンパス	相川 らら

◆ **総合パフォーマンス部門**

金賞	VAW栄光ハイスクール	P→★number
銀賞	香川キャンパス	國重 美柚
銅賞	星槎国際立川・八王子	TACHIHACHIエンタStars

◆ **スピーチ部門**

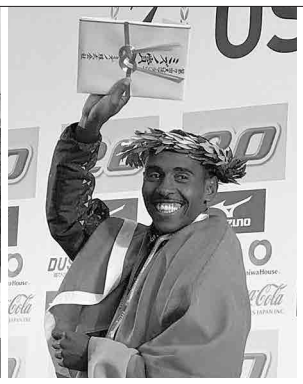
最優秀賞	星槎国際八王子	中村 遥
優秀賞	星槎国際横浜鴨居	黒川 眞海
優秀賞	星槎国際名古屋	吉峯 有紗

未来に向けてスポーツを超え

2017年11月26日に第7回 大阪マラソンが開催され、約13万人の中から抽選で選ばれた国内外約3万2千人のランナーが大阪の街を駆け抜けた。フルマラソンは、午前9時、大阪城公園前をスタート。御堂筋、中之島、京セラドーム大阪、通天閣などの名所を回ったあと、大阪南港のインテックス大阪にゴールするコースで行われた。世界こども財団と星槎グループのサポートのもと、大会の招待選手として参加したエリトリア3選手のうち、カレアブ・ギラガブル選手が2時間12分3秒の記録で見事優勝。他の2選手も、テスファマルヤム・ガシャズギ選手3位、フカドゥ・クブルアブ選手が8位と、全員が入賞を成し遂げた。また、ブータンからも、世界こども財団と星槎グループの招聘で2選手が参加。サンゲイ・ワンチュック選手がブータン国内記録を4分以上更新し新記録を樹立した。

大阪マラソン終了後、両国の選手は、星槎グループ大磯キャンパスを来訪したほか、神奈川県・小田原市・箱根町・大磯町とで共同で行っている「SKYプロジェクト」に参加し、日本のこどもたちとも交流した。ふだんは遠く離れていても、同じ空の下、スポーツを通し、言葉を超えて、笑顔が連鎖していく。世界こども財団では、そんな活動を今後も継続していく。

こどもたちの手づくりメダルを胸に（小田原市立足柄小学校にて）


大阪マラソン優勝者
カレアブ・ギラガブル

第7回 大阪マラソン エリトリア、ブータンの選手が出場 カレアブ・ギラガブル選手が優勝！

古い歴史を変えた！新しい歴史をつくれ！

―星槎道都大学硬式野球部 祝勝会―

先の第48回 明治神宮野球大会で、北海道勢として初めての準優勝を果たした、星槎道都大学硬式野球部の祝勝会が、12月18日、北広島クラッセホテルで行われた。会には、道内野球関係者や地域の方々などおよそ300名が参加。野球部員もほぼ全員が参加し、大いに盛り上がった。

山本学長からの応援お礼や山本監督、大保主将からの準優勝報告に続き、学校法人国際学園の井上一理事長の音頭で「おめでとう！」の乾杯で、祝宴がスタート！ 野球部員は20歳以上であっても、この日は飲酒をしないことと取り決められ、出席いただいた来賓からは「真面目な野球部だ！」と褒めていただく場面もあった。

途中、北広島市の上野市長のご挨拶では「出陣の挨拶に来てくれた時、星槎道都が勝てば、ファイターズが北広島に来る、って言ったろっ!?」という言葉に笑いがあふれた。また、遠路はるばる駆けつけてくれた星槎国際湘南の土屋監督は、高校時代に対戦した、プロも注目の左腕、福田俊（すぐる）（経営3年）投手を壇上に上げ、「高校時代から比べ物にならないくらい成長させてくれた山本監督に感謝！ 北海道で成長できることを証明してくれた！」と、星槎道都野球部で成長できる凄さを語ってくれた。

また、この秋のリーグ戦から復活した応援団による演舞で、会場の凛とした雰囲気の中での、応援団長の「フレー！フレー！セイサ！」のエールに、「まさに、強豪復活の烽火ですね！」との声が多数聞かれた。

新チームは既に始動しているが、新主将の平山泰聖（経営3年）が最後に「こんなにたくさんの方々から応援していただいていることを忘れずに、優勝を目指したい」というメッセージに、新しい歴史をつくろうという強い意志を感じた。

全国の星槎の仲間からは、たくさんのメッセージをいただいた。学生マネージャーたちが、それを「ホントに、全国から応援してもらっているんだね」とニコニコしながら掲示していた姿が印象的であった。普段は、縁の下の力持ちとしてチームを支えているマネージャーたちも誇らしげであった。

山本文博監督の準優勝報告

第71回 全日本総合バドミントン選手権大会

平成29年11月27日から12月3日、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館にて第71回 全日本総合バドミントン選手権大会が開催された。この大会に、星槎大学スポーツ身体表現専攻の学生が2名出場した。

米田健司はNPO法人トリッキーパンダースに所属し、日本バドミントンのトップリーグであるS／Jリーグでプレーしながら、保健体育科教員免許の取得を目指す。

佐伯祐行は昨年まで日本ユニシスでプレーし、日本のダブルストップ4を長年維持してナショナルチームとして海外トーナメントにも出場。今年度から福井県の国体選手として福井県体育協会所属となり、保健体育科教員免許の取得を目指している。

11月28日、各種目の予選が行われ、米田が出場した。米田の予選一回戦はインターハイ3位の友金／河野（神戸村野工業高校）に2―0（21―16、21―2）と格の違いを見せて快勝。続いて本選出場決定戦にてインカレ8強の仁平／酒井（明治大学）に2―0（21―16、21―16）と接戦を制して本選出場を決めた。

29日、米田は前年度優勝、日本ランキング1位、世界選手権3位の園田／嘉村（トナミ運輸）と対戦した。世界トップレベルのスピードを誇る「ソノカム」の速いラリー展開にミスを重ね、序盤から徐々に点数を離され、主導権を握ることができず、0―2（13―21、13―21）で敗退した。第5シードの佐伯は、本選からの出場し、インカレ3位の市川／馬屋原（日本体育大学）と対戦した。上位進出が期待されたが1―2（18―21、21―11、19―21）で敗退した。非常に残念な結果だったが、彼等が教育現場へ巣立っていくことは日本バドミントン界においても重要な意味がある。世界でメダルを目指す為にはいち早く世界を主戦場として戦わなければならない情勢になっており、高校を卒業したら大学を経由しないで実業団に所属する選手が増えている。これらの選手のセカンドキャリアへの道を切り開く先駆者として、彼等には大きな期待を持っている。

（林直樹）

ジャンピングスマッシュする佐伯選手

米田選手

星槎国際湘南女子サッカー専攻 ニュージーランド研修報告

星槎国際湘南女子サッカー専攻は11月28日（火）から12月6日（水）の9日間、ニュージーランド海外研修旅行に行ってきた。

研修旅行のテーマは「ニュージーランド研修旅行を通して異文化と歴史を学び、スポーツを通して仲間を作り、共に平和について考える機会とする」とした。それを実行するための具体的な取り組みを大きく三つに分けた。

①第二次世界大戦や植民地の歴史から学ぶ平和教育
②スポーツを通した仲間づくり
③広大な自然とマオリ文化から学ぶ国際理解教育

以上3つを掲げ、事前準備を行った。事前準備では星槎高等学校の垣内麻由美教頭やFGCの太田啓孝さんを講師として招き、星槎グループの海外交流の歴史を学んだ。

また、FGCの小野木愛さんからは現地で活かせる英会話を、男子サッカー専攻のスタッフからは、オーストラリア研修旅行での学びや日本との文化の違いを学んだ。そして、ニュージーランド研修旅行の意義や目的を理解し、ニュージーランドの文化や歴史などもしっかりと学んだ。準備を通して改めて日本文化や星槎について理解し直す良い機会となった。

ニュージーランド研修は試合と観光を中心に展開した。

アフターマッチファンクションの様子

ニュージーランドU-20女子代表と対戦し8－1で勝利した。試合を通して、体格の差からくる、パワーの違いなどを肌で感じ、どのように相手と対戦するか非常に勉強になった試合となった。また、星槎の技術力が通用する部分もあり自信に繋がった。ニュージーランドU-20女子代表との試合の後にはアフターマッチファンクションといった、対戦チーム同士の交流があり、共に健闘を称え合い食事をする文化を体験した。事前学習の合間に作成した、ネームカードをそれぞれ相手選手に渡し、会話を楽しんでいた。また、日本から折り紙を持っていき、そこで鶴の折り方などを教えてあげる場面もあり、スポーツを通した仲間づくりができた、とても有意義な時間となった。

観光では、オークランド博物館に日本のゼロ戦が置いてあり、第二次世界大戦の際に日本とニュージーランドが交錯した様子が伺えた。また、イギリスとニュージーランドの関係や先住民のマオリ族の文化についても学び平和についてより考えるきっかけとなった。

シープショーでは羊の毛刈りを観てニュージーランドの文化に触れ、ファームツアーでは実際に羊やアルパカに餌をあげ、触れあった。午後はトレッキングで森の中を歩き、大自然を感じた。この研修旅行が生徒たちにとってとても有意義でさらなる飛躍のきっかけとなることを切に願う。

最後にニュージーランド研修旅行実施にあたり、お力添え頂いた皆様、保護者の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

（星槎国際湘南　女子サッカー専攻コーチ　渡邊滉平）

NZU20 代表と

ダイエット②

オピニオン

星槎国際湘南 陸上競技部コーチ **門馬 健大**

なぜ夏は痩せる？冬は太る？

夏になると痩せる、冬は太ってしまう。それはなぜなのか考えたことがあるだろうか。今回はダイエットに興味がある中で、夏と冬の体重変化を理解していただきたい。

●夏が痩せる理由

夏場は暑さで食欲が低下気味となる。夏場は体温が外気温と変わらなくなるため、体は自然と熱を作らないように反応する。するとエネルギーをさほど必要としなくなり、食べものを必要としなくなるのだ。食べたくても食べれなかったり、運動後に食べられなくなるのは、食べることで発生するエネルギーを身体が嫌がっているためだ。そして夏は体温を下げようと汗をたくさん掻くため、冷たい飲み物を多く摂取するようになる。そのことで胃腸が冷え、弱ってしまうことや汗と一緒にミネラルも失われ、体調を崩したりする関係で食欲不振を起こしてしまう。また、交感神経・副交感神経の乱れの原因もある。交感神経とは、活動している時、緊張している時、ストレスを感じている時にはたらく。副交感神経とは、休息している時、リラックスしている時、眠っている時にはたらく。

これらが正常に働くのがベストだが、これが夏の暑さのために交感神経が活発化した状態が続く。すると本来食欲で働く副交感神経の作用が働かず食欲が自然と低下する。

運動せずに単に食欲がなくなって体重が減るのは、栄養不足と筋肉が落ちることで体重が減っているだけで、代謝の悪い体が出来てしまっている（筋肉がなくなると代謝は悪くなる）。実は脂肪は落ちていないことが多い。夏は流し込んでお腹を満たすだけにならないように、しっかりとタンパク質もとって筋肉を保護するようにしたい。

●冬が太る理由

せっかく夏に痩せたのに戻った、体重が増えた。その理由は、夏が痩せる理由に書いたような痩せ方をした場合は、単にリバウンドである。つまり夏の暑さの影響で代謝の悪い身体の状態の中、身体の交感神経・副交感神経の役割が正常に働くようになり、食欲が戻りよく食べる。しかし代謝が悪い関係で脂肪が燃焼しにくくなっているのが太りやすい原因なのだ。

そして冬はクリスマスやお正月などイベントなどで食が進み、ついつい食べ過ぎてしまう。忘年会・新年会も多く、お酒も飲む機会も増え、思わず節制することができなくなってしまう季節。前回のダイエットで書いたように消費カロリーより摂取カロリーの方が多くなったために太ってしまう。食べすぎた、飲みすぎたという人は次の日に食事を減らすなど工夫すると太りにくくなるので実践してほしい。

また、冬は寒くて動きたくない季節だ。夏といえば海やプール・キャンプ・フェス・お祭りなどアクティブに体を動かす事が多いが、冬といえばクリスマス・お正月・バレンタインデーなど圧倒的にインドアが多く動く機会が少ない。寒さもあり、動く機会が減るため運動不足に陥り冬太りになる。

以上のことが夏は痩せる、冬は太ると言われている原因。このことを知っていれば、ダイエットの取り組み方も変わってくるので、是非とも参考にして体重管理・健康管理をしてほしいと思う。

星槎教師列伝

生徒を全国優勝へ導いた伝説の教師

星槎国際高等学校 厚木学習センター副センター長 **原 彩子**

今年の全国高等学校定時制通信制全国ソフトテニス大会で、星槎国際八王子の岩上希海（3年）と松井海南江（3年）が女子団体・女子個人で見事優勝し、2冠を手にした。その2人を指導したのが星槎国際厚木・副センター長の原彩子だ。

ソフトテニスを始めたきっかけは、クラスメイトがソフトテニスをやっていて興味を持ったから。そこから、今にも続く、長いソフトテニス人生が始まった。経歴は、小学校から大学と部活動やクラブチームで活躍し、社会人になった今でも少しずつではあるが続けている。福島県では福島県国体強化選手にも選ばれていた。

実績としては、小学校時代は福島県大会優勝、高校時代は福島県総体県北予選優勝、大学時代は東北総体準優勝、全国教育大学選手権準優勝、全国教育大学選手権準優勝、社会人では東北選手権準優勝、神奈川県選手権第3位、川崎市春季選手権優勝、川崎市秋季選手権優勝など、華麗なる実績をもつ。

ソフトテニスをしていて楽しかったことは「今考えると、クラブチームや部活動の先輩や後輩、同僚などそれに伴うコミュニケーション」と。年齢が上の方とも話す機会が多かったので、今でも年齢関係なくコミュニケーションを取ることができるそうだ。また「プレーを続けることで忍耐力がついた」とも。筋肉もたくさんついたおかげで、体力は今でもなんとか保っていて、それらの経験や財産が社会人になって活きている実感があるそうだ。

逆に、辛かったことは、練習しても勝てないこと。しかも社会人になって練習する時間がないのが残念。しかし、大学時代の先生に「ラケットの素振りだけでも、続けることが一番難しい」と言われたことが印象に残っていて、練習が全然できなくても、一生続けようと思ったそうだ。年齢を重ねても続けることができるのはソフトテニスの魅力だと話されていた。ただし、いきなりプレーして肩を壊さないようにすることを心がけていて、「すでに2回壊していることは教訓です」と苦笑い。

もっとも印象に残っている試合は、社会人1年目の東北選手権決勝戦で、急に足をつったこと。惜しくも優勝を逃し「すごく悔しかった」「体調管理はとても大切」と本当に悔しそうに話をしていた。

星槎でスポーツを頑張っている生徒に対しては、「心も体も健康に成長してくれることを祈るばかり。自分の糧になる経験をして欲しい」と笑顔で話されていたのが印象的だ。

ニュース速報

打鼓音 惜しくもベスト4

12月10日に太鼓祭日本一決定戦が行われた。北日本・東日本・西日本・南日本の予選を通過した全8チームと昨年の優勝チームの合計9チームが埼玉県大宮ソニックシティで日本一を争った。

今大会は打鼓音ジュニアで活動する地域の子どもたちから星槎高等学校和太鼓部、星槎国際高等学校の生徒と総勢20名が出演した。昨年は惜しくも3位と悔しい思いを残したが、「神華（しんか）」という曲を2年かけ完成度を上げて渾身の力で演奏した。打鼓音の演奏は迫力と技術力の高さ、渾身の力で打ち込むメンバーがすべての力を出し切った演奏だった。演奏が終わると客席からは盛大な拍手と歓声が響き渡り、演奏したメンバーたちも心にぐっとくる達成感を感じたようだった。

年々レベルも高く、難易度が上がる中、結果としては優勝には届かなかったが、これまでの先輩が築き上げた和太鼓の活動を振り返り、打鼓音が大切にしてきたものを再確認させられた大会だった。

奈良マラソン2017 星槎道都大学 原由幸が優勝

奈良市のならでんフィールドを発着点とする「奈良マラソン2017」が開催され、全国から集まった約1万7千人の市民ランナーが冬の大和路を駆け抜けた。

フルマラソン男子の部で、初出場の星槎道都大学の原由幸が2時間23分53秒で初優勝した。

星槎中井スタジアム

中井町の中央公園野球場は「星槎中井スタジアム」としてスタートしました。

地域の活力と特性を生かした“まちづくり”のため、ネーミングライツによる募集に学校法人国際学園が応募し、締結した。

セイスポ

2018年の抱負

男子サッカー専攻 監督 永瀬裕記

関東大会県予選ベスト8、インハイ県予選ベスト16、選手権県予選ベスト16、県2部リーグ第5位。

昨年度のスタート時は一昨年度のメンバーから比べると個々の能力は劣り、かなり心配したが、チームのレベルをチーム全員が共有・自己認識し、自分自身としっかりと向き合いながら努力を怠らずに一つ一つ着実に積み上げてきた。課題は全て解決できたわけではないし、プレーやオフザピッチの精度はまだまだといったところもあるが、客観的に見て生徒たちの取り組みは素晴らしいものだったと思う。結果として、昨年度の成績を上回り、県内ベスト8、強豪がひしめき合うリーグ戦で残留（第5位）という結果を残すことができた。昨年の経験は次のステージ、次のシーズンに活きてくるとシーズン終了時に話をした。

昨年度、男子サッカー専攻はタイトル獲得や全国大会といった華々しい舞台には立つことができなかったが、着実に成果を出し、新たな成長を遂げたと確信している。昨年シーズン3年生と共に様々な経験をした1、2年生は、みんなを信じてやれば何でもできるんだといった先輩たちが築いた文化を継承していく。

現在、すでに新チームに切り替わり、新たな歩みがスタートしている。新しいチームの歴史、個人の成長を創造するために全力で取り組んでいる。今シーズンも挑戦して行く立場に変わりはない。星槎で大きな花を咲かせるため、下へ下へと図太い根を伸ばしていく。何か特別なことをするのではなく一日一日できることを精一杯取り組んでいく。

皆様、今年度も引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

星槎国際湘南男子サッカー

女子サッカー専攻 総監督 柄澤俊介

2018年はもう一度、細部を見つめ直す年にしたい。女子サッカー専攻を立ち上げてから5年が過ぎ、少しずつ妥協をしてしまっている部分が増えてきている気がする。負けた試合を思い返すとほんの少しのミスが自分たちを追い込み自滅してしまっていたような気がする。特に昨年の選手権の日ノ本高等学校戦とインターハイでの藤枝順心高等学校戦は単純なクリアですらままならなかった。

サッカーではボール1個分ずれただけで次のプレーが変わる。10m先でボール1個分ずれると20m先では更にずれる。極端に言えば点が入るか、カウンターから失点するかはボール1個分パスがずれただけで変わるということだ。簡単なミスは直接失点に至らなくても流れや雰囲気を悪くしてしまう一番改善すべきポイント。たった1本のミスだが、その1本のミスを無くすためにはそれに隠れた膨大な努力がなくてはならない。

10㎝の精度にこだわるプレー、動き出しのタイミングや声がけのタイミングなど細部にこだわることで全体の質を上げていきたい。そのためには体力的な土台も必要だし、冷静でいられるメンタルの強化も必要だ。あらゆることに妥協をしない1年にしたい。

今年度も皆様のご声援にお応えできるようなサッカーをしていきたいと思いますので宜しくお願い致します。

星槎国際湘南女子サッカー

硬式野球部専攻 コーチ 木村彰浩

昨年度は『必笑』というチームスローガンを掲げ、どんな結果になろうとも胸を張って笑顔で終われるように、何事にも全力で取り組んでいくことを一番に考えて日々の生活を送った。その結果、神奈川県大会3位やプロ野球選手誕生といった星槎国際湘南硬式野球部「初」となる偉業を成し遂げることができた。県大会2回戦敗退という屈辱を味わった新チーム。その後、各々がもう一度チームと自身を見直し、何が必要でどのような行動を起こしていくべきなのかを全員で考え、10月上旬、それに沿ったかたちで再度、新チームをスタートさせた。

この新チームの課題、つまり来年度の課題は投手力を含めた守備の強化と走力の向上だ。攻撃はとても力強く、この冬のトレーニングでより磨きがかかることは間違いない。あとはそこに付随して走力をどれだけ伸ばすことができるか。足にスランプはないので、守備範囲の拡大や戦術の多様化など、とても大きな武器となる。

野球の8割は投手で決まるといっても過言ではない。投手力も然りだ。この課題を見事に克服して、春には皆が驚愕するチームへと変貌したい。

今年度の夏の高校野球は100回目のメモリアルな大会となるため、全国各地で非常に大きな盛り上がりをみせている。

訪れた機会を逃すことなく、高校野球を通して、星槎の名を全国に轟かせますので、温かいご声援の程、よろしくお願い致します。

星槎国際湘南野球部

バレーボール専攻 コーチ 廣田歩

バレーボール専攻が本格的にスタートしてから4年が経った。一昨年、関東高等学校バレーボール大会神奈川県予選会（関東予選）でベスト8になり初の関東大会出場を果たし、昨年、全日本高等学校バレーボール選手権大会神奈川予選会（春高予選）第3位になることができた。確実に星槎は強くなっていることを実感している。着々と成績を残すことができているが、このような結果を残すことができているのは、選手のたくさんの努力と星槎のバレー部を支えてくれる人たちがいたからだ。

試合に勝てず負ける度に、自分たちには何が足りないのか、修正する部分はどこなのか、勝つために選手一人ひとりが真剣に考え練習をしてきた。誰一人と最後まで絶対に諦めない気持ちを持ち、戦うことができたからこそ、このような結果を残すことができたのだ。

2018年は「最高なチーム」を目指して頑張りたい。ただ試合に勝ち、強いだけではなく、チームとしての挨拶や礼儀、マナーをしっかり守り、人として成長する。

バレーボールは繊細なスポーツなので、普段の自分の姿、性格も含めて全てがプレーに出てしまう。一番大事な場面で弱い自分が表れてしまうため、普段の生活から諦めずに取り組むこと、人が嫌がることを率先して行うこと、相手の気持ちになって考え、思いやりの心を持って行動することを大切にしていく。そして、たくさんの人に愛され、応援されるチームになること、それが「最高のチーム」だ。

今年度もバレーボール専攻へのご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

星槎国際湘南女子バレー

陸上競技専攻 監督 坂田和

1年間があっという間に過ぎた。昨年1月にエリトリアの留学生を迎え、4月は新入生を迎え2年目の陸上部がスタートした。

留学生は、まず日本の生活、高校生活、そして日本の文化に慣れることを念頭に置いてスタートした。

陸上については、順調に試合に出場した者、故障で試合に出られなかった者と課題が多く残った1年間でもあった。

2018年は、新たに新入生（5名）、留学生（3名）を迎える予定でいる。少しずつだがチームとして大きくなってきている。

大きな目標は2つ。1つ目は、インターハイ予選に部員全員が種目エントリーすること。部員数は少ないが一人ひとりが主力選手であるという自覚を持ち、取組んでもらう事が目的だ。

2つ目は、神奈川県高校駅伝に出場すること。7名で1チームなので、出場はできるが、出場規定5名の平均タイムが5000mで17分15秒以内となっている。留学生については2名までの登録で1区以外の区間のみ出走できる。以上の規定をクリアする事が目標になる。

これらの目標をクリアするためには、陸上競技だけではなく学校生活も充実することで競技力が向上すると考えているので、スポーツを通して多くの学びがあることを子どもたちに伝えていきたい。

留学生もエリトリア、ブータンと国際色豊かになって来ている。その中で言葉の力（コミュニケーション）が大事になってくる。日頃から学校や寮、練習で学んでいるが、2018年は緊張感を持って喋る場面を増やしていき日本語レベルを上げていきたい。

最後に今年も変わらぬご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

星槎国際湘南陸上部

男子バスケットボール専攻 監督 亀鷹良輔

2017年はバスケットボール専攻として初めての経験が多く、様々な場面で選手たちの学びがあった1年だと感じている。入学して1ヶ月で高校総体を迎え、覚えたてのナンバーコールをノートにとり、選手たちが前日の練習で確認していたことを思い出す。また、入学当初から、過度なドリブルを制限しており、パスバスケにこだわって指導してきた。その中で、パスを出した後の行動についてキャプテンを中心に何度も話し合いをしてきた。パスでセンターラインを割ることや、オフェンスに時間をかけないなど、細かくチームの約束を増やしていった。夏には岐阜県の標高1800mの御岳高原に上がり合宿を行い、集団生活の中で互いに尊重しあう事や助け合う事を学んだ。

秋には新人戦を迎え、夏から取り組んできたゾーンプレスディフェンスを武器に1回戦を突破することができたが、試合の内容に納得いかない生徒たちはVTRを何度も見ていた。振り返ってみると、「もっと良くしたい」という気持ちを選手とスタッフが常に考えていた1年だった。

2018年は練習環境や、新入生の入学により練習内容の変化と2017年の環境とは全く違うものになると考えている。1つのポディションを数人で争う環境が自然とできてくること。その中で、選手同士が切磋琢磨できる環境を設定する事が必要であると思う。そして、1年目から掲げていた県大会出場を目指したい。

星槎国際湘南男子バスケット